櫻井義秀著『死者の結婚－先祖崇拝とシャーマニズム』

北海道大学出版会，2010年3月刊，260頁，2,400円（＋税）

金　律里

本書は，櫻井義秀氏によって著された「死者の結婚」という習俗に関する論文集である。死者の結婚とは，未婚で亡くなった死者を遺族が結婚させ冥福を祈る種々の儀礼である。未婚のまま死亡したことは祀る子孫が無いこと即ち祖先になれないことであって，死者の結婚という習俗は祖先崇拝が行われてきた地域で見られる現象である。その地域のなか，著者はとりわけ日本の東北と沖縄の事例を中心に死者の結婚を紹介し，中国や韓国の例も挙げ，東アジアにおける死者の結婚の紹介及び比較を行っている。

日本においては子孫によって祀ってもらえない存在を無縁仏といい，祟りや災難をもたらすと思われ，そのため特別な儀礼が行われてきた。本書で扱っている死者の結婚もその特別な儀礼の一種である。ただ，本書はその儀礼を紹介するにとどまらず，「祖先崇拝とシャーマニズム」という副題がついているように，死者の結婚習俗の基底にある祖先崇拝とシャーマニズムの介在についての分析も行い，ひいてはその習俗を生み出した社会構造に関しての考察をも行っている。これを通じて著者は，結局，死者の結婚は未婚の死者を祀る生者の問題であることを明確にしようとしている。

本書の構成は以下の通りである。

第一章　未婚の死者に捧げる絵馬
一　祖先崇拝とは何か
二　ムカサリ絵馬習俗
三　生者のライフコースと死者のライフコース
四　ムカサリ絵馬習俗の歴史文化的背景

第二章　祖先崇拝と社会構造
一　黒澤の社会構造
二　ムカサリ絵馬習俗と家族関係
三　祖先崇拝と家の構造関連

第三章　花嫁人形と死者への思い
一　花嫁人形習俗
二　奉納者調査

三　津軽の巫俗と死者の祀り
第四章　沖縄の冥婚習俗と祖先崇拝
一　沖縄と東南アジアを比較する
二　グソー・ヌ・ニービチ
三　沖縄の宗教と儀礼
四　巫俗とジェンダー

第五章　冥婚の比較文化･社会構造
一　東アジアの冥婚
二　冥婚の比較類型論
三　結婚の一形態としての冥婚

以下，各章の内容を紹介しその後，本書の有する意義と問題点を検討したい。

先ず，第一章においては，山形県山形市大字黒澤に遺されているムカサリ絵馬や山形県山形市大字山寺にあるムカサリ人形奉納の習俗の実態について記されている。著者によれば，「ムカサリ」とは，結婚・祝言を意味する山形県の方言であって，未婚で亡くなった子供に対して遺族が結婚式の絵馬や婚礼衣装を着せた人形を寺院に奉納したものがムカサリ絵馬やムカサリ人形である。

ムカサリ絵馬は普通の絵馬を補完する異例なものであって明治・大正期では一般的なものではなかった。それが，ロバート･Ｊ・スミスのいう「祖先崇拝」から「供養主義」への祖先崇拝変化と，祖先崇拝におけるシャーマンの役割との影響で広まったと著者は分析している。なお，1978年ＮＨＫの番組の影響で一般に知られるようになったと説明している。一方，寺院に奉納された絵馬は昭和に入るとほとんどがムカサリ絵馬に統一されてきており，なお1970年代後半からのものが多数を占めていることから，ムカサリ絵馬奉納習俗はわりと新しい宗教習俗であるといえる。

このようなムカサリ絵馬には婚姻と死者儀礼という二つの問題がかかわっている。先ず，通過儀礼としての結婚について。未婚で亡くなった霊は年忌供養ではなく結婚を求めるのだと著者はいう。未婚のまま死んだ死者は結婚できなかったことに対して恨みを残しているとされる。それは，当然のことながら，遺族の観念の反映であり，結婚という通過儀礼をなしてからこそ家の中で安定した地位を持ち得るということである。そして，死者儀礼について。異常死した死者に対する特別な葬送儀礼や死者儀礼は日本では昔から行われており，厚く祀らないと祟りがあると思われてきた。ここで注目すべきは，そのような死者供養にシャーマンが深くかかわっていることであり，本書の第一章から第三章まで取り上げている東北と，第四章で取り上げている沖縄では，周知の通り，イタコとユタがそのような役割を担ってきた。著者によれば，山形県村山地方の場合，オナカマと呼ばれるシャーマンたちの役割が，祖先崇拝の習俗に大きな影響を与えているという。子が死んだ親を祀ることを順縁というなら，親より先に死んでしまった子供を親が祀ることは逆縁という。山形県のムカサリ絵馬は逆縁の一種であって，既に述べたように，ここにはシャーマンがかかわっている。では，なぜシャーマンは逆縁の死者にこだわるのか。著者の言葉を借りれば，シャーマンたちは死者の口開きをはじめとした民俗宗教に根ざした死霊の扱いの専門

家であるからだという。もう一つの理由としては，東アジア社会におけるシャーマニズムの社会的な立場，つまり，社会的な有用性は認められるものの，「宗教」として承認は得られないことからである。すなわち，シャーマニズムは社会的に主導的な宗教の補助としてそれに寄り添いながら，時折その主導的な宗教が包含し得ない領域を包含しながら在り続けた。順縁の死者を一般的な祖先崇拝の仕方として祀り，逆縁の死者にはシャーマンの介在により特別な儀礼を行うことは，その好例である。

第二章においては，著者の調査地域であった山形市大字黒澤（旧南村山郡黒澤）の社会構造及び家の相続制度を分析し，ムカサリ絵馬習俗の発生原因を探る。結論を先取りすると，この地域においてムカサリ絵馬習俗の発生原因として著者が挙げているのは，①明治における長男子相続制度の確立，②戦没者慰霊，③シャーマニズムの介在である。

黒澤は全戸数の8割以上が農家の農業社会である。戦前の本家が地主，分家が小作という構造は消滅したが，身分の名残を示す家格は変化せず，旦那衆と一般の家との格差は依然残されているという。また，明治憲法に基づいた長男子単独相続が普及しており，現在においてもそれは著しい。そこから必然的に，父と長男が構造的に強く結ばれる家父長的父子関係が想定され，とりわけ家格を守るため家長が跡取りの配偶者選択に絶対的権力を持っているという。要するに，跡取りと家長が祀るものと祀られるものという互恵的な関係により構造的に結合しているのである。

こういう中で，未婚の長男の死は，①跡取りがなくなるという点から家の秩序を乱し，②未婚ということから正常なライフコースから逸したことを意味する。その乱れを正すため生まれた儀礼がムカサリ絵馬奉納の習俗である。未婚で死亡した長男の霊の問題は，家族成員に非日常的な出来事が起きた場合に，遺族がその原因をシャーマンに尋ねることにより浮かび上がる。シャーマンの言葉により，非日常的な出来事の原因は家を継承し得なかった長男の祟り・知らせと解釈され，その霊を鎮めるためムカサリ絵馬が奉納される。

この地域で著者が先祖観について行った調査によると，先祖霊とは「自分の家の初代のみ」が35％，「自分の家で生まれ死んだ人々全て」が37％という回答であった。ここで注目すべきは，高年齢層ほど祖先を直系に限定する傾向があり，若くなるほど妻方の祖先も含む人々全てを祖先と考えている点である。これを著者は，系譜を意識した家中心の先祖観から家族中心の先祖観への移行とみている。

第三章は，青森県の花嫁人形奉納に関する内容である。花嫁人形奉納は，2008年現在，弘法寺，川倉賽の河原地蔵尊などで行われているという。著者の分析によると，人形奉納が本格化したのは1985年以降で，終戦後戦死者の家族が奉納したのが始まりである。その習俗は弘法寺からほかの寺院や地蔵堂へ伝播したものらしく，ここにもムカサリ絵馬の場合と同様ＮＨＫの番組により奉納者が全国から集まるようになったという。奉納の契機はイタコやゴミソといった民間巫者が介在するケースが多く，子供を失った親の気持ちが巫者の口寄せの語りと共鳴し，花嫁人形奉納を生み出すに至り，とりわけ1975年から奉納数が増えてきた。その新しさから，この習俗は伝統的な家意識や家格の維持，婚姻に対する規範的な意識の故に成立したのではないとし，著者は，未婚の死者となった家族への思いの中にどのような人生観や家族観が含まれているのかを考察する。

著者によると，未婚の死者が問題になるのは，誰もが結婚するような時代になって，結婚が平均的日本人に必須の人生儀礼と観念されるようになったからだという。1960年から1970年代までは未婚率が最も低い時期であり，著者はこれを誰でも結婚することを自明とした社会の出現という。また，前述したように，日本において異常死の死者に対する特別な葬送儀礼と供養儀礼の伝統があった。それに加え，1970年前後盛んになった水子供養から，親が子を供養することへと拡張していった。つまり，家中心の祖先崇拝から家族中心の供養主義へという祖先崇拝の変化により，ムカサリ絵馬や花嫁人形習俗が生まれたのである。ムカサリ絵馬は明治時代の家父長制度と結びつき新たな祖先崇拝を，花嫁人形は誰もが結婚すべきだという社会規範と親が子を供養する新しいし死者供養を，それぞれ示しているといえよう。

人形奉納を行うに至った契機は，著者が調査した121件の中，「知人・親戚の紹介」が57件，「巫女さんの勧め」が21件，「マスコミ」が20件である。また奉納者の心情については，奉納後は「安堵感」や「ほっとした」，「成仏した［と思えた］」，「親としての責任を果たした」という気持ちであったという。

また，著者は第三章において津軽の巫俗と死者の祀りについても触れている。津軽地域では伝統的シャーマンは減っていき，それに代わり霊能者が増えつつあるという。その中で，著者が挙げているのは，シャーマンの相談方式である。昔は相談者たちはシャーマンの自宅を訪ね，自分の順番を待ちながら他の相談者の相談内容を聞けた。そこでシャーマンの宗教的世界観を学びつつ相談者同士に語り合ったりして学習出来たという。だが，個別対応による顧客カウンセリングがメインになった現代においては，シャーマンと相談者また相談者同士の連帯感が薄れてしまい，著者はこれについて懸念を抱いている。

第四章においては，沖縄のグソー・ヌ・ニービチ（後生の結婚）を中心に沖縄のシャーマニズムと祖先崇拝について説明をしている。第一章から第三章まで言及した山形県と青森県と同様に，家族構成員に病気など何らかの問題が発生すると民間巫者を訪ね，ユタからハンジ（判示）が出される。ユタが出すハンジは祖先や位牌にかかわる場合が多く，離婚して亡くなった親族の女性が前夫の元に帰りたがっているというハンジが出されたら，ユタの指導の下に位牌･遺骨などを移動させる。これがグソー・ヌ・ニービチである。

この章ではグソー・ヌ・ニービチについて触れる前に，沖縄の宗教について概論的な説明がなされている。著者の言葉によれば，沖縄の民族宗教は琉球神道といい，これには御嶽と呼ばれる聖地，ニライカナイ（東方海上・海底にある楽土で祖霊がいると考えられる）の伝承，オナリ神（兄に対する妹の霊力・守護力を意味し，兄の政，妹の祭式による祭政一致の原理にもつながるとされる）の伝承などがあるという。また周知の通り，カミンチュ（神人・神役）と呼ばれる人々がいて，地域祭祀を担当するのをノロ，民間領域で家族祭祀にかかわるのをユタという。また著者によると，沖縄の祖先崇拝の世界観は次のように要約できる。先祖（それは死霊から祖霊までを含めた観念である）は子孫から手厚い祀りを受けることでグソーに安住できるので，子孫が祀りを怠ると先祖はそれを知らせ，直系子孫の病気や災害が起こる。「知らせを受けた子孫は先祖の拝みを念入りに行い，わびを入れなければならない。わびを入れれば先祖は納得し，問題は解消するのであって，ある意味で呪術的世界観でもある。」（175頁）

このような伝統的信仰と琉球社会の近代化の過程で確立した位牌祭祀と門中制とが相まって現

れた宗教現象の一つがグソー・ヌ・ニービチである。グソー・ヌ・ニービチという習俗にはグソー観すなわち夫婦同甕の規範意識と女元祖（イナグガンス）排除という門中制の家族原理がかかわっている。周知の通り，沖縄の門中制が確立していく過程で民間巫者であるユタが地位を確立すべく，規範的価値を語るようになり，その中の一つがイナグガンスの排除である。これは，女性は婚家側の墓に入るしか祖霊化の道がないということを意味する。もちろんこれは家父長制に基づいた祖先崇拝を押し付けたものであって，トートーメ問題といった社会問題までになっている。第一章から第三章で取り上げた東北地方においては，シャーマンが死者供養にかかわる伝統が薄れつつあるに対し，沖縄においては依然としてユタの影響力が強いと著者は考えている。

第五章は，本書の結論部ではあるが，これまでの議論をまとめながらさらに新たな事例を挙げているので，節毎にみてみることにしたい。先ず，第一節では死者の結婚という習俗をまとめつつ華人社会と韓国の冥婚習俗を紹介している。著者は，死者の結婚を通して，生者の人生観や宗教的世界観を伺えるという。今までみてきたように，死者の結婚には結婚して子孫を残してからこそ一人前の人間という人生観が潜んでいる。それ以外にも，長男子相続の規範的家族観，シャーマンの介在，更に子に先立たれた親の切なさも混ざっていると言えよう。この死者の結婚習俗は華人社会にも存在する。著者は廣田律子を引き，それによれば，中国においては，後継者を立てる必要条件として冥婚を見るよりも，死者への哀惜･慰撫と死霊への畏怖の念が根本的な動機であるという。また，死者同士の婚姻の場合が多く，この点が死者を存在しない存在（？）と結婚させる日本との違いである。韓国においては，儒教式の祖先崇拝が主流であるが，それだけでは家族を亡くした遺族の感情を慰めきれず，シャーマニズムがそれを埋めてきた。そのうち著者は冥婚の人形劇という，シャーマンの介在により人々が生々しく恨みや願いを語っている習俗を紹介している。

第二節においては，死者の結婚に関しての先行研究である竹田旦の類型論を紹介し，それに著者の研究を付け加え著者なりの冥婚類型を提示している。竹田は次の三項目で東アジアの冥婚を類型化している。一つ目は，死者結婚の目的・動機。これは死者を結婚させる目的が未婚の死者に対する慰霊であるのか，それとも家を継ぐという立嗣であるかの問題である。二つ目は，新婚者の関係・状態，すなわち，死者の結婚の対象が死者同士かそれとも一方が生者あるいは架空の人物であるか，また花嫁と花婿が有縁か無縁かという問題である。三つ目は，儀礼の内容・執行者について。すなわち遺骨の合葬か，それとも位牌の移動か，また儀礼にシャーマンがかかわっているかの問題である。著者は，これに青森の事例を付け加えてなお文化的社会構造をも比較しながら，著者なりの類型化を行っている。これまでの議論を踏まえた上で，著者は，中国と韓国は父系血縁中心，沖縄は門中中心，山形と青森は系譜・家中心の出自集団として，社会構造を要約する。

以上の類型化をもとに，更に冥婚習俗を生み出した社会構造と歴史について述べている。著者の言葉を借りれば，冥婚習俗を支えるものは父系出自集団に特有の死霊観と結婚に対する規範意識，及びシャーマニズムの問題である。それに寺社への参詣，地蔵信仰といった民間信仰が加わることで，これまで紹介してきた死者の結婚習俗が生まれたという。このような冥婚という習俗は今後どうなるのであるか。著者によれば，死者の結婚は未婚で亡くなった男女のごく一部にのみ行われる儀礼であって，結婚にこだわる現代的儀礼である。ここには，個人を家族という集団

の構成員としてみなし，そのため新たな家族を築く結婚にこだわってきた東アジアの文化背景があるというのが著者の主張である。本書で扱っている地域の冥婚習俗は，家族に関わる死霊観，規範意識に支えられていると著者は言っている。

第三節においては，アフリカの亡霊婚・女性婚を紹介してからアジアとアフリカの冥婚比較まで行い，本書の結論として著者は次のように記している。「祖先崇拝研究における冥婚研究の意義は，未婚の死者を親が供養する逆縁の関係が，かえって親と子の順縁の関係を逆照射するからだと考えている。人々の理想的な人生行路観，それを反映したあるべき死霊観のなかで，祖霊化の道からはずれた死霊の処遇が決定される。しかも，恨みを残し，祟る･障る霊が祖霊に転換される方法を見ることで，その地域・時代に生きる人々の規範的人生観･社会観のイデオロギー的拘束力を知ることが出来る。シャーマンの語りによって，自然の感情として死霊への畏怖の念が喚起され，日常性の中に埋め込まれた社会のルールが再生産されているといえよう。冥婚は，祖先崇拝研究，家族制度研究，シャーマニズム研究がユニークに交錯する興味深いフィールドとして今後も注目されるのではないか」（234－235頁）。

以上が本書の概観である。ここに評者のコメントを加えたい。先ず，第一章と第二章であげている黒澤は，明治民法施行以前から長男子相続が優勢な地域であったと著者は書いている（60頁）。もちろん明治民法により長男子単独相続になるが，そもそも長男子相続が優勢であった地域においてはそうでない地域と比べてそれほど変化が起きたとは考え難い。また，黒澤は戦後においても戦前の地主－小作を示す家格が残存しており，これから黒澤は明治以前からの家制度の「伝統」が残っている地域であると見なすことが出来る。この地域で何故ムカサリ絵馬という新たな習俗が現われたのかについて著者は長男子相続を強いた明治民法の施行にその原因を求めているが，その他にも重要な原因があると考えられる。著者によれば，黒澤においては高度成長期以降から農業外の収入への依存度が高くなったという。戦後の復興から経済成長を成し遂げ1970年前後には急激な成長率が安定している。この時期はムカサリ絵馬流行の時期でもある。これは花嫁人形も同じであり，したがって経済発展とそれに伴う社会変化などの分析が欠かせないと考える。ある集団内の変化を分析する際，外部的要因も視野に入れるとさらに信頼度が高まるのではないか。なお，祖先崇拝から供養主義への変化という巨視的な立場からの見方ももっと欲しかった。

二つ目は，本書で扱っている地域の範囲を指摘したい。第一章から第二章までは山形県，第三章は青森県，第四章は沖縄県そして第五章においては東アジアとアフリカまで取り上げている。広い地域の事例を紹介し，死者の結婚という話題を投げかけ第五章にて東アジアにおける死者の結婚の類型化を試みた点－竹田の類型化に父系出自集団という項目だけを加えたものであるが－は本書の秀逸なところではあるものの，その過程において範囲を広げ過ぎたのではないかと思われる。特に第五章においては，中国や韓国さらにアフリカまで取り上げ，第一章から第三章まで行ったような緻密な分析が足りなかったような気がした。全体的なバランスを考えたら，第一章から第三章までの内容を割愛して第四章から第五章までの東アジアの事例をさらに具体的に分析したほうが良かったと思われる。

三つ目は，「人間社会が結婚をどのようなものとして考え，表象し，儀礼化してきたかを，結婚しなかったものたちへの葬礼や供養儀礼を通して考察していく」（ix頁）との著者の目標がど

れほど達成したかについてやや疑問が残る。評者としては，変わりつつある祖先観や祖先崇拝儀礼，逆縁の死者を祀ることへの知識が本書から得られたが，結婚観に関してはそれほど明瞭に述べられていたとは思えなかった。シャーマニズムと祖先崇拝とを結びつけるものとして死者の結婚を取り扱っているが，シャーマニズム・祖先崇拝・死者・結婚という四つの要素のうち死者と祖先崇拝に偏っているように思われた。それゆえ，テーマそのものは斬新であるにもかかわらず，祖先崇拝や死者儀礼といった分野にすでに集積されている先行研究と比べて新しさがよく分からなかった。特に死者の結婚に関する先行研究である桜井徳太郎や竹田旦の研究とも大きく変わらなかった。すでに指摘した社会経済的な側面からの分析やシャーマニズムについてのさらなる分析，例えば伝統的シャーマンと現代的といえる霊能者の違いとそれぞれが死者の結婚習俗において如何なる役割を果たしているのかをもっと述べて欲しかった。

本書はとりわけ戦後変わりつつある祖先観の現れ方としての死者の結婚と，本書評では詳しく述べなかったが，著者が幾つかのところで言及した水子供養は，変わりつつある祖先観や祖先崇拝について示唆を与える。その点で本書は祖先観や祖先崇拝に興味を持っている人には一読の価値があるといえよう。